

性」では、古代ギリシア世界を構成していた大小様々な都市が目が向けられる。政治システムや宗教儀礼などに相違点が見出される一方で、これらの都市は、体制や法にかかわる基本的な枠組みを共有していたとされ、とりわけ戦時の宣誓順守や遺体埋葬は、宗教的責務ともみなされる重要な慣習であったことが、ここで示される。

最後に第八章「アレクサンドロス—ギリシア史終幕?」では、ペロポネソス戦争終結直後からアレクサンドロスの死までが概観され、マケドニアの支配によってギリシア世界の独立自治の時代は終わるものの、ヘレニズム時代と古典期の間には一定の継続性が見られることが指摘される。また、フィリッポスやアレクサンドロスが台頭した前四世紀には「傑物が活躍するための歴史的な環境が作り出されていた」として、ペルシア戦争とペロポネソス戦争という二つの戦争による社会の変化についても論じられる。

介 著者は、文献史料や考古資料に基づいた豊富な具体例を挙げ、関連する諸分野についての知識や興味深いエピソードを適宜紹介すると同時に、歴史が「創られる」過程

を丁寧に描き出す。古代ギリシアの歴史を構築していく上で基礎となる考え方が提示されている点は、本書の特長であり魅力でもある。場合によっては、このような詳細な記述が挿入されることで、議論の本筋や年代の順序が追いつらなくなっているものの、訳者の佐藤昇氏によって章ごとに設けられた解説文や訳注は、これを上手く補っている。また、巻末の読書案内は、邦語文献が加えられたことにより、さらに充実したものとなっている。本書は古代ギリシア史研究の入門書として、非常に有益な一冊であると言えるであろう。

(四六版 二六一+四頁 二〇二一年七月)

刀水書房 税別二八〇〇円

(杉本陽奈子 京都大学大学院文学研究科修士課程)

### 藤井讓治編

### 『織豊期主要人物居所集成』

織田・豊臣政権期の研究は、少なからぬ部分を書状などの無年号文書に依拠して進められている。当該期はめまぐるしく政治状況が変化する時代であり、無年号文書の正確な年次比定が求められる。その確定作業においては、古記録などの同時代史料により発給者・受給者等の居所や行動を調査する作業が不可欠である。

本書はこのような織豊期の研究をする上で非常に有益な研究成果である。編者の藤井讓治氏をはじめ、堀新氏、藤田恒春氏、相田文三氏、早島大祐氏、尾下成敏氏、中野等氏、穴井綾香氏、福田千鶴氏、松澤克行氏、柚田善雄氏により分担・執筆され、織田信長(堀)、豊臣秀吉(堀・藤井)、豊臣秀次(藤田)、徳川家康(相田)、足利義昭(早島)、柴田勝家(尾下)、丹羽長秀(尾下)、明智光秀(早島)、細川藤孝(早島)、前田利家(尾下)、毛利輝元(中野・穴井)、小早川隆景(中野)、上杉景勝(尾下)、伊達政宗(福田)、石田三成(中野)、

浅野長政（相田）、福島正則（福田）、片桐且元（藤田）、近衛前久（松澤）、近衛信尹（松澤）、西笑承兌（柚田）、大政所（藤田）、北政所（藤田）、浅井茶々（福田）、孝藏主（藤田）の、天下人、大名、奉行人、禅僧、公家、奥の女性たちなど二十五名の人物が取り上げられている。これらの人物がいつ、どこで、何をしていたのかという基本的なデータを、この本書のページを繰るだけで容易に確認することができる。また、初歩的な誤りを犯す恐れも大いに減退することになる。かかる成果によつて近世初期の事実確定の水準は大いに引き上げられるのである。うことは疑いようもない。

しかし、問題点がないわけではない。例えば相国寺の僧、西笑承兌の行動に関して、本書では基本的に『鹿苑日録』から抽出されたデータを基に居所が示されている。承兌に関しては伊藤真昭氏の一連の研究があるが、参考文献を見る限り本書では参照されていないようである。そのためか既に伊藤氏の「大和の寺社と西笑承兌」〔佛教史学研究〕四二・二、二〇〇〇年〕において指摘されており、この時期の大和の研究者には比較的良好に知られた出来事である慶長

七年六月十一日の正倉院開封や寺領給与の事前調査を目的とした承兌らの大和下向については見落とされている。この後、承兌は十五日か十六日未明に大和を出発し、上洛するが、このような短期間に往復可能な行動の中には反映されていないものもあるということには、利用の際に注意する必要がある。そして、このような本書のデータを更新しうる情報をいかにフィードバックし、学界として共有していくかが本書刊行後の最大の課題であろう。そのような場が、学術雑誌の片隅や、インターネット上に設けられることが望まれる。

(B5版 四七六頁 二〇一二年七月)

思文閣出版 税別六八〇〇円

(林晃弘 京都大学大学院文学研究科博士課程)

## 受贈誌

(二〇一二年五月十一日)  
(二〇一二年八月一〇日)

哲學研究(京都哲學會) 五九一

東洋文化研究(学習院大学東洋文化研究所) 一三

所) 一三

Historia Mexicana (El Colegio De

Mexico) 一三九

學術研究—地理学・歴史学・社会科学編—

(早稲田大学教育学部) 五九

日本學士院紀要(日本學士院) 六五—三

國家學會雜誌(國家學會事務所) 一二四—

三・四

神道史研究(神道史学会) 五九—一

史學雜誌(史學會(東京大学文学部内)) 一一〇—四

中央研究院 歷史語言研究所集刊(中央研

究院歷史語言研究所) 八二—一

大分県立歴史博物館 研究紀要(大分県立

歴史博物館) 一一

人文地理(人文地理学会) 六三—二

經濟研究(一橋大学經濟研究所) 六一—二

日本学刊 JAPANESE STUDIES (中国社

会科学院日本研究所中華日本学会) 二〇